

論文要旨

学位論文題目： 青年の養育認知に関する研究 ——自尊感情・適応との関連 ——

氏名： 内海緒香

子どもは、親から一方的に社会化される存在というよりも、自発的に環境を解釈し積極的に行動を起こす主体である。青年期の適応を考えるうえで、親の行動や態度に対する子どもの見方を理解することが必要と考えられる。本論文の目的は、複数の研究方法により青年期の子どもの主観的視点から捉えた養育認知について調べ、養育認知と子どもの適応とのつながりを探り、養育認知の意義や機能を明らかにすることである。

本論文は、青年期の養育と適応的問題に関する先行研究をまとめ、本研究の目的、研究方法とデータ概要を示した序章から第3章、養育認知の内的妥当性を検証するため青年期の養育に関する認識を、三つの研究により、親子それぞれの視点から確認した第4章、その結果を受け、養育認知を測定する尺度を開発した第5章、青年期の養育認知の特徴や変化を調べ、養育認知と自尊感情および適応との関連を調べた第6章、研究を総括する第7章から構成されている。

序章において、“青年期の子どもが捉えた親の養育はどのようなものか、青年期特有の子どもの適応や不適応とどのような関係性があるのか”との問いを提示した。第1章では、本論文で取り上げる“青年期”と“養育”の範疇を示し、子どもの視点と主体性を強調する、発達の構成主義的見方と自己決定理論を本研究の理論的根拠として使用することを述べた。第2章では、まず、青年期の親子関係に対する見方の変遷と青年期の発達課題の達成における親子関係の重要性に触れ、養育研究を進めるうえで、妥当性と信頼性を兼ね備えた養育尺度の不足を指摘した。次に、本論文では、子どもの養育認知を測定する尺度を開発するにあたり、受容と二つの統制から成る、3次元アプローチを採用することにした。引き続き、3次元モデルにおける、二つの統制概念を測定する尺度の問題点を説明し、測定の問題を解決するために、社会的領域理論のアプローチを使用することを述べた。最後に、養育認知が予測すると考えられる、青年期の自己発達に重要な自尊感情と、青年期の適応を説明し、養育認知と適応との間の仮説を示した。

第3章では、本研究の目的を達成するための諸研究の構成、研究アプローチ法の特徴、研究データの概要、さらに、研究倫理上の配慮について述べた。

第4章、研究1において、女子大学生 ($N=4$) と母親 ($N=1$) に対する面接調査により、青年期の養育に関する内容分析を行い、「自己管理」と「考えや好み」に関する2種類の統制、受容、モニタリングの実態を記述した。研究2では、中学生親子 ($N=303$) をサンプルに用いた質問紙調査により、3次元モデル (受容・心理的統制・確たる統制) における、親子の因子間相関を調べ、二種類の統制概念の妥当性について検証した。研究3では、中学生親子 ($N=131$) をサンプルに用いた質問紙による準

実験により、三つの社会的領域における親子の判断の違いを比較した。その結果、個人的領域における親からの要求は、心理的統制として、子どもから否定的に受け止められる可能性があり、健康安全領域における親からの要求の認知は、モニタリングとして、子どもから否定的に受け止められない可能性があることが示唆された。

第5章の研究4では、研究1から研究3までの結果を受け、中学生から大学生までの十分なサンプル ($N=1,043$) により、“受容” (6項目)、“心理的統制” (6項目)、“モニタリング” (3項目) の因子の弁別性を明らかにするとともに、因子間相関を含めた、尺度の妥当性と信頼性について確認した。

第6章の研究5では、中高生 ($N=224$) サンプルによる2時点間の質問紙調査により、三つの養育認知、自尊感情、リスク行動の時間的な変化と、性別と学年によるレベルの違いを調べた。自尊感情やリスク行動の水準に変化がみられなかったものの、養育認知における、性差・年齢差、および時間的な変化の可能性が示唆された。研究6では、自尊感情を媒介とした養育認知と子どもの自尊感情や適応との関連を検証した。その結果、それぞれの養育認知は異なった問題と特異的な関連を持っていることが示された。また、養育認知の変化によりクラスターを分類し、クラスター間の自尊感情や適応の違いについて調べた。その結果、受容認知とモニタリング認知のレベルが一貫して高く推移し心理的統制認知が低下したクラスターは、受容認知とモニタリング認知のレベルが低く推移し心理的統制認知が上昇するクラスターに比べ、問題行動が少なく向社会行動と自尊感情が高かった。以上の結果から、養育認知は、横断的にも縦断的にも子どもの自尊感情や適応に関連があることが示された。

第7章では、研究1から研究6までの結果を総括し、青年期の子どもの心理社会的適応を考えるうえで、子どもがどのように親の行動を解釈し受け止めているか探ることの重要性に言及するとともに、日本の青年の養育に対する認知や、養育認知と適応との関連も、西洋文化の青年を対象とした知見と、概ね一致していることを確認した。仮説に反した研究結果について考察を行い、養育認知に関する今後の研究の方向性、臨床や関連する研究分野への本論文の貢献について述べた。